

旧南洋群島の日本語話者のスタイル変異 —自称詞と文体に着目して—

今村 圭介

1. はじめに

本研究は旧南洋群島の残存日本語話者のスタイル変異の特徴を明らかにすることを目的としている。旧南洋群島では、第一次世界大戦から第二次世界大戦の終戦まで日本の統治下にあり、日本語での教育が行われた。当時の日本語での教育を受けた世代の話者は個人差があるものの、現在まで高度な日本語能力を保持している。そのような日本語は「残存日本語」と呼ばれ、特殊な文法的・語彙的・音声の特徴などの研究が行われている。例えば、ロング・今村(2013)では、パラオの残存日本語話者の文法、音声、語彙にみられるパラオ語の影響を中心に考察している。一方、旧植民地で複数の自称詞、丁寧体と普通体が混用されることは、簡(2011)や渋谷(2003)などで指摘されてきているが、その体系と要因の記述が十分であるとは言えない。母語話者が対話相手や場面によって規則的に使い分ける形式が、旧南洋群島民の日本語でどのように再編成され、体系ができているのだろうか。その規則性と背景にある要因について探っていく。¹

2. 研究概要

2.1. 理論背景

真田(2009b)は、旧植民地地域は「脱・標準の地、言葉の規範からの解放区」であると指摘し、その言語体系の独自のルールを考察している。例えば文法事項では、確認要求表現の「デショウ」の用法が相手の知らない情報にまで広がっていること、丁寧体の構成が否定や過去の否定で、「普通体+デス」という形になっていることなどが指摘されている。さらにそれが、日本国内で使われる日本語の変化の先取りであり、日本語の未来を予測するものであると指摘している。

さらに、文法体系のルールに加え、音韻体系、アクセントなどにもその様な独自の特徴が観察されている。例えば、コスラエ語話者の音韻体系に母語の影響が見られ、長母音の短呼、[h]音の脱落、有声子音の無声化が起こっていること、トラック語の話者の語アクセントが全て2音節目に来ることなどが考察されている。

つまり残存日本語には、規範の弱化と言語の合理化に向けた変化と母語の影響が見られることがわかっている。この様な影響はスピーチスタイルの運用にも見られ、残存日本語の話者は独自のスタイルの運用体系を形成しているのではないかと考えられ

¹ Preston(1996)は自由変異の存在に否定的であり、すべての変異が何らかの要因によって規定されると考えており、本稿でもその前提に立って分析を行っている。したがって、(スタイルなどの)運用と(文法などの)体系は対立的に扱われることも多いが、運用にも体系があると考えている。

る。

母語話者の文体の運用と自称詞の運用では、相手によって決まる強い運用規範が影響すると考えられる。第二言語話者の場合、その様な規範を持ちながらも、母語の社会言語学的背景が影響し、独自の運用をされると考えられる。スタイルの使用規則に母語の体系が影響する様子がこれまでの研究で観察されている（李 2003、上仲 2007 など）。残存日本語の場合は、一般的な外国語学習者に比べ規範意識が薄いため、より独自の体系が顕著に見られると考えられる。²本稿では、その様な体系を記述・考察していく。

2.2. 分析対象

分析対象は以下の表 1 の話者である。なお、データは全て半構造化インタビューを行い、現在の生活、日本時代の経験、現地の状況などの聞き取りを行った。サイパンの話者、トラックの話者のデータは新井（2008）で公開されているデータを再分析した。小笠原の話者はロング・今村・新井（2011）で公開されているデータである。他のデータは、筆者とダニエル・ロング氏が共同で収集したデータである。会話は全て調査者 2 人と話者（また、一部同席する親族）の間で行われた。小笠原の話者を対象にしたのは、ロング・新井（2012）が指摘するように、小笠原と旧南洋群島の日本語の間に言語交流があり、言語的共通点が見られるため、文体と自称詞の運用にも類似点が見られたからである。

表 1. 分析対象の話者

名前	性別	出身地	生年
JB	男	サイパン	1923 年
BP	男	トラック（後にサイパンに移住）	1933 年
SB	男	サイパン	1925 年
KN	女	パラオ	1932 年
TA	男	パラオ	1928 年
ST	男	パラオ	1920 年
TM	女	パラオ	1923 年

2.3. 分析観点

分析に際して、これまで提唱されてきた理論や分析を用いていく。これまでスタイル変異は、以下の表 2 のように様々なアプローチによって考察されてきている。

² 金澤（2008）では、外国語学習者の日本語の独自体系が、日本語の将来を予測するものであるという、真田（2009）と同様の指摘がされているが、残存日本語により、その様な傾向が顕著にみられる。やはり残存日本語話者の間では、一般的な第二言語話者に比べて規範意識が薄いと考えられる。

表 2. スタイル変異形成に影響する言語外的・言語内の要因

<p>言語外的要因</p> <p>(a)ポライトネス理論 (politeness theory)</p> <p>(b)わきまえ理論</p> <p>(c)発話への注意度 モデル(Attention to speech)</p> <p>(d)オーディエンスデザインモデル(Audience design)</p> <p>(e)アコモデーション理論 (Accommodation theory)</p> <p>(f)発話者デザインモデル(Speakers design)</p> <p>言語内的要因</p> <p>(g) 知覚的な顕著性(linguistic saliency)</p> <p>(h) チャンク、prefabricated pattern</p> <p>(i)産出の容易性</p>

(a)ポライトネス、(b)わきまえ、(c)発話者への注意度、(d)オーディエンスデザイン、(e)アコモデーションの各理論は、基本的にバリエーションが相手に影響されるという点で共通している。³(a)ポライトネスは Brown & Levinson (1987)で提唱された理論であり、D=対話相手との距離、P=力関係、R=その発話行為の重さ、によって相手のフェイスを脅かす度合い変わり、それに応じて話者が用いる発話のストラテジーが変化するという理論である。(b)わきまえは、前述のように、井出他 (1986)、井出 (2006)で提唱された、相手との関係により、社会的な運用規範が決まり、話者はそれにしたがって発話をするという理論である。(c)発話への注意度は、Labov (1972)で考察されている、相手や話題によって発話への注意度が変化し、それにより発話が変わるという理論である。(d)アコモデーションは、Giles (1984)で述べられている、相手に好意的であれば、発話が相手のものに近づき、逆に敵対的であれば、発話が相手のものから遠ざかるという理論である。(e)オーディエンスデザインは、Bell (1984)で述べられている、対話相手、会話を聞いている人、さらに会話を聞いているかもしれない人に影響され、発話が変わるという理論である。

(e)発話者のデザインは、Schilling-Estes (2002)で述べられている、話者が対話相手に影響されるだけでなく、主体的な自己を表示することで発話を変化させるという理論である。小森 (2008) では、日本語話者の自称詞の使用に関してこのアプローチから考察しており、話者の主体的な発話の変化が考察されている。

また、第二言語話者の場合、言語内的要因が変異の形成に影響することが分かっている。知覚的な顕著性として、文中の形式の位置により知覚の難易度が変わり、変異

³ それぞれは、変異の形成要因としての理論であるが、必ずしも同質の変異を扱っているわけではない。ポライトネス理論、わきまえは発話を扱っており、発話の注意度、アコモデーション、オーディエンスデザイン、発話者デザインは、形式の変異を扱っている。日本語の文体は、形式ではあるが、発話にも関わるため、全てのアプローチを考える必要がある。

の現れ方が変わることが考察されている⁴。また、学習者は、言語表現を文法形式としてではなく、表現の塊（チャンク）で覚えているため、変異の形成の要因となることもこれまで指摘されている（上仲 2007 など）。さらに、真田（2009）、簡（2011）、今村（2013）などで、丁寧体の複雑な形は、産出の難しさから回避される可能性が指摘されている。

本稿では、これらの要因を中心に旧南洋群島の話者のスタイル変異を考察していく。

3. 文体（丁寧体と普通体）の運用

3.1. 終助詞による分類による記述

まずは終助詞による分類を行った上で記述を行っていく。終助詞は話者の対話者への伝達態度を表明するため、文末の使用に規則性があるのであれば、何らかの形で違いが表れてくると考えられる。以下表 3 は、全話者の丁寧体と普通体の使用実態である。

表 3a 話者の談話内の丁寧体と普通体の運用⁵

	JB		BP		SB		TA	
	普通	丁寧	普通	丁寧	普通	丁寧	普通	丁寧
φ・ダ/デス・マス	36	12	22	21	178	8	15	35
ネ/ (デス・マス) ネ	3	13	2	6	2	2	2	34
ヨ/ (デス・マスヨ)	9	14	1	12	23	1	4	1
ヨネ/ (デス・マス) ヨネ	3	2	—	2	—	—	3	4
ケド/デスケド・マスケド	—	—	—	—	—	—	—	—
カラ/ (デス・マス) カラ	—	—	—	—	—	—	—	—
カラネ/(デス・マスカラ)ネ	—	—	—	—	4	—	1	—
ナ/—	8	—	—	—	9	—	—	—
ダロウ/デショウ	—	—	—	—	—	8	—	14
ダロウネ/デショウネ	—	1	—	—	—	—	1	1
ノ・ンダ/ンデス	47	36	—	17	3	2	13	1
ンダヨ/ンデスヨ	13	22	—	1	16	5	26	2
ノネ/ンデスネ	15	18	—	—	—	1	—	—
ンダヨネ/ンデスヨネ	9	10	—	1	1	1	15	3
ンダナ (ンダヨナ) /—	7(2)	—	—	—	—	—	—	—
使用数 (計)	152	128	25	60	236	28	80	95
丁寧体使用率	45.7%		70.6%		10.6%		54.3%	

⁴ 簡（2011）では、slobin(1985)のその様な主張を参考に、残存日本語話者は、従属節での丁寧体が使用されにくいことが考察されているが、データ数が少ないため、主張の妥当性は確認できない。

⁵ 表がページ体裁の関係で 2 つに分かれたため、表 3a、3b とした。表の数は使用実数である。

表 3b 話者の丁寧体と普通体の運用

	ST		KN		TM		NS	
	普通	丁寧	普通	丁寧	普通	丁寧	普通	丁寧
φ・ダ/デス・マス	48	15	20	14	21	75	5	—
ネ/ (デス・マス) ネ	1	1	—	4	1	1	3	—
ヨ/ (デス・マス) ヨ	1	—	1	—	—	—	12	4
ヨネ/ (デス・マス) ヨネ	—	—	—	—	—	—	—	—
ケド/ (デス・マス) ケド	—	—	—	—	1	1	—	—
カラ/ (デス・マス) カラ	—	—	1	2	—	—	—	—
カラネ/ (デス・マス) カラネ	—	—	3	—	—	—	2	—
ナ	1	—	—	—	—	—	—	—
ダロウ/デショウ	1	1	—	—	—	—	2	25
ダロウネ/デショウネ	—	—	—	—	—	—	—	—
ノ・ンダ/ンデス	3	4	128	26	1	1	5	1
ンダヨ/ンデスヨ	—	17	—	—	—	—	35	29
ノネ/ンデスネ	—	—	—	—	—	—	—	—
ンダヨネ/ンデスヨネ	—	—	—	—	—	—	10	—
ンダケド/ンデスケド	—	10	—	—	—	—	—	—
使用数 (計)	55	48	153	46	24	78	74	59
丁寧体使用率	46.6%		23.5%		76.5%		44.4%	

表 3 から以下の 2 点が考察できる。

- A) 簡 (2011) の台湾の話者に比べると丁寧体を多く使用する傾向にある。
- B) 普通体使用に傾く話者と丁寧体使用に傾く話者、混用が著しい話者が見られ、話者間で共通する特徴は特に見られない。

まず、簡 (2011) の台湾の残存日本語話者に比べると、丁寧体の使用率が高いことが分かる。簡 (2011) のデータでは、丁寧体を全く使用しない話者、ほとんど使用しない話者もあり、一番多く使用する話者でも 28.5%である。その要因としては、旧南洋群島の日本語話者の日本語能力が高いという事実が考えられる。ロング・新井(2012)、ロング・今村 (2013) で説明しているように、サイパン・パラオでは、他地域に比べ、日本人の居住率が高く、それが話者の日本語能力を高くする要因となっている。初対面の話者には丁寧体を使用するのが一般的な日本語運用の規範であるため、日本語能力が高いほど、それに近づくと解釈できる。

丁寧体を多く使っている中で、母語話者には起こらないと考えられる丁寧体と普通体の著しい混用が、起こっている様子が見られる。それらは共通してある部分にのみ混用が見られるのではなく、話者によって様々である。JB、NS は、様々な終助詞を

使用する上、丁寧体と普通体の混用が激しい。NS はンデスヨとンダヨを両方使用するが、ンデスヨネを全く使用せず、ンダヨネを使用しない。BP は基本的に丁寧体を使うが、言い切り・デス省略の普通体、一部終助詞が付く普通体が使用される。SB は言い切り・デス省略の普通体を基本に普通体を多用し、その中に丁寧体が一部使用される。TA は（デス・マス）ネの形では丁寧体を使うことが多く、ノダ文を使用する形は普通体を使用することが多い。ST も同様の TA と同様の傾向を見せ、ンデスヨは使用するが、ンダヨは全く使用しない。KN と TM は使用する文末のバリエーションは少ないが、丁寧体と普通体を混用している。

これらの話者の普通体と丁寧体の混用は、一つの要因で説明できず、言語外的要因、言語内的要因が複雑な形で絡みあっていると考えられる。慣習的に決まっている丁寧体と普通体の使い分けの規範意識が薄い場合は、その使用体系が統制されず、様々な様相を見せるということが指摘できる。次節でその要因を考察していく。

3.2. スタイルシフトに影響するいくつかの要因

スタイルの運用に影響すると考えられる点は複雑であるが、いくつか可視化することでできる点を以下で記述する。それらは TA の応答発話と自発的発話の使い分け、チャンクの使用、KNに見られた時間軸による心理的なシフトである。

3.2.1. 機能による丁寧体と普通体の使い分け

前節で記述したように、話者 TA は、調査者からの質問に対する応答の発話と、その後続く自発的な発話で文末が異なる様子が観察される。

例1：R：今アングウルに猿がいますか？

TA：います。そうね、一次世界大戦、それで、ドイツの軍隊が何匹か持ってきたんだよね。それから、ずっと、今じゃ、何匹いるかわからない。

例2：R：日本人はどの地方から来てましたか？

TA：さあ、よくわかりません。おりました。戦争の後はこの方。日本人だけがいた。沖縄の人がいたかもしれないけれども、みんな日本語を使ってたんでしょ、仕事も機械を使ってたからね。どれが日本人か、どれが沖縄人かわからなくなっちゃった。

全ての応答の発話に丁寧体、応答以外の発話に普通体を使用するわけではないが、顕著な傾向が見られた。例文1,2では共に、質問に対して丁寧体で答えた後に、普通体の発話にシフトしている。応答形式としてデスマスの言い切り、もしくは終助詞ネが付く形で返答をしている。その後の自発的な発話は、普通体に異なる終助詞が付く形が使用される。応答では簡略に相手への伝達意識を表すために丁寧体を使い、さら

に発話が続く中で自身の発話への注意度が下がり、普通体を使用すると考察できる。⁶

話者は伝達意識を文末で伝えることで対話を促進する。そのような伝達意識（発話が相手に向いていること）を表出する最も簡単な形式がデス・マスである。普通体の場合は、終助詞がないと相手に発話が向けられているかが示されない。⁷発話が向けられていることを示すためには、終助詞を付ける必要があり、終助詞を付ける場合には終助詞の機能が付加されてしまい、デス・マスで言い切る形と伝達の形が変化する。つまり、丁寧体の言い切り形式を使うことが、最も簡略に相手に伝達意識を伝える方法であり、その理由で応答に丁寧体が使用されやすくなる可能性が指摘できる。

つまり TA の丁寧体と普通体の運用は、デスマスの形式に伴う待遇機能だけでなく伝達機能の影響が可能性を指摘できる。その様な機能の違いによって丁寧体と普通体を混用する傾向は、客観的な記述が難しいが他の話者にも見られると考えられる。

3.2.2. チャンクの影響

TA の発話の中で、一つの「ちゃった」という形式がチャンクとして使用されるため、普通体が使用される様子が観察された。つまり、文法形式として「ちゃう」を活用して運用するのではなく、過去の普通体「ちゃった」を塊で覚えて使用しているのである。前述の例2や例3のように、「ちゃった」の使用は7例あるが、全ての例で普通体が使用されていた。第二言語話者は、このように覚えた形式をそのまま再生することが観察される。それはチャンクとして一つの形式だけでなく、様々な表現についても言えることであり、この様な要因で丁寧体と普通体の著しい混用が起こっている可能性が指摘できる。

例3 TA: えーと戦後は大体、三十六年日本におりましたということが聞きましたよね。
三十六年、戦争が始まって、みんな帰っちゃった。

3.2.3. 発話者との関係性

以下表4はKNの文末形式の使用を20分毎に3つに分類したものである。0~20min.では、丁寧体の使用が3分の1以上を占め、その形も4種類見られる。20~40min.では、丁寧体の使用が5分の1以下に下がり、形も3種類になる。40~60min.では丁寧体の使用が10分の1以下になり、項目数も2つになる。つまり、段階的に丁寧体の使用が少なくなっていることがわかる。話者KNは調査者に対して、初対面から心理的に近くなるにつれてスタイルを段階的にシフトさせていると言える。

⁶ これには複数の要因がかかわっていることも考えられ、調査者の丁寧体による質問に対するアコモデーションとしての丁寧体使用の可能性もある。つまり、調査者が丁寧体を使用しているため、合わせて応答部分だけ丁寧体を使用するということも考えられる。

⁷ この点に関して、李（2003）でも、普通体の発話が相手に向けられているものと、そうでないものがあると分類され、分析が行われている。

表4. KNの時間軸による丁寧体と普通体の使用変化

	0~20min.		20~40min.		40~60min.	
	普通	丁寧	普通	丁寧	普通	丁寧
φ・ダ/デス・マス	8	10	7	2	7	2
ネ/(デス・マス)ネ	—	2	—	2	—	—
ヨ/(デス・マス)ヨ	—	—	1	—	1	—
カラ/(デス・マス)カラ	—	2	—	—	—	—
カラネ/(デス・マス)カラネ	1	—	3	—	1	—
ノ・ノダ/ンデス	28	17	50	6	50	3

全て初対面の会話であるためKNのように明確に相手との関係性でスタイルをシフトさせる例は他に見られなかったが、少なからず相手が影響して文体の運用が行われる可能性は指摘できる。

記述した三つの要因はそれぞれの話者だけに顕著に見られたものであった。他にも様々な要因が影響すると考えられるが、可視化できる形で記述することが不可能であった。

4. 自称詞の使用

4.1. 自称詞の使用実態

次に自称詞の使用について考察する。話者の自称詞の使用は表5のとおりである。女性の話者 KN、TM はワタシのみの使用であり、男性は複数の自称詞を使用している。通常、母語話者は話者の対話者との関係性や役割を表すため、1種類から、多くても2種類の自称詞を使用するが、旧南洋群島の日本語話者は3種類の自称詞を使用している例が見られる。

表5. 旧南洋群島の日本語話者の自称詞

	ワタクシ	ワタシ	ボク	オレ
JB	—	88	17	8
BP	—	15	—	3
SB	—	10	4	6
TA	—	1	12	1
ST	1	15	16	—
KN	—	14	—	—
TM	—	32	—	—
NS	—	17	4	8

例 17 : R ; じゃあ日本の色々な会社で働いていたんですか？

ST ; 私？

例 18 : R ; 学校卒業した後はどこかで働いていたんですか？

ST ; 私ですか？

例 19 : 僕は卒業して一年間は、〈急に話題が変わる〉私シゲオ・テオングと申します、名前。テオング。それは、その人はお母さんのお父さんなんで...

例 20 : 僕はほかの島あまり知らないんですけど、この島は銚で魚を突くこと。

ST はボクとワタシを交互に使用している様子が見られる。ワタシはインタビュー一として役割が明確な場合に使用が見られる。例えば例 17,18 では、質問に対する聞き返しにワタシを使用している。この点は他の話者と共通しているようである。また例 19 のように自分の名前をもう一度紹介する場合はワタシを使用している。なお、複数形は全てワタシたちが使用される。

4.2.6. NS



例 21 : 近衛公兵っていうのは日本で一個連隊しかないの。それが私の部隊だったの。

例 22 : こっちも戦士でやってるからさ、俺にビンタでも張ってみやがれ、ぶっ通してやるからって、帯剣をこうやったの。そしたら俺んとこ来たら黙って通ってたよ。

例 23 : 先生とも（日本語を使っていた）。だって日本の先生でしょ。そして僕は日本語が下手だから、英語ばかり使ったんで。

話者 NS は話題によって自称詞の使用が変化するように見られる。基本的に使用する自称詞はワタシであり、相手意識によって標準的な自称詞ワタシを選択する傾向にある。オレを使用するのは、過去の体験の話で、男らしさや勇ましさを誇示する相手が話題に登場する場合である。例 22 は、輜重演習の際に軍曹から嫌がらせを受けていた際の話で、話者 NS の勇ましさを語っている場面である。ボクは、陛下との体験を語る際、学校での体験を語る際に使用される。例 23 は学校の体験を語る場面である。先生や陛下など謙遜する相手がいる場合に使用される。つまり、話者 NS はワタシが基本形として使用され、話題の人物により自己のアイデンティティの投影が変化し、それが自称詞という言語形式に反映される形となると言える。

4.3. 南洋の話者の自称詞の選択

旧南洋群島の残存日本語話者の自称詞の使用には個人差が大きく、その使い分けも様々であった。その中でも話者は話題によって自己の投影の仕方が変わり、それが選択する自称詞に影響する様子が見られた。母語話者の場合も同様のことが起こらないとは言えないが、対話相手によって影響されることが多く、母語話者と旧南洋群島の

話者で変異の形成の要因が異なることがうかがえる。⁸

5. まとめ

これまでの考察結果から、旧南洋群島の日本語話者のスタイル変異に関して、次のように結論付けられる。文法事項は合理化する方向があるため、共通した独自の規則が見られるが、スタイル変異に関しては合理化する方向がないため、個人差が大きく共通した規則性は見られない。対話相手によるスタイル運用の制約（規範）から解放された結果、各自の習得環境・言語使用環境で習得した日本語が、様々な言語内的、言語外的要因によって変異が形成される。つまり、「言葉の規範からの解放区」では、スタイル変異はある一定の共通した方向に収斂するものではなく、拡散していくものであると言える。⁹

参考文献

- 新井正人 (2008) 『マリアナ地域における残存日本語の中間言語的特徴』 首都大学東京 修士論文
- 李吉鎔 (2003) 「フォーマルな談話での非デスマス形式の切換え—日本語母語話者と中間言語話者の比較—」 『阪大社会言語学研究ノート』 5:79-96 大阪大学大学院文学研究科社会言語学講座
- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動—大学生の場合』 南雲堂
- 井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』 大修館書店
- 今村圭介 (2013) 「英語を母語とする日本語学習者の中間言語的スタイル切り換え—文末形式を中心に—」 『日本語研究』 34 号 pp.73-85 首都大学東京
- 上仲淳 (2007) 「中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルの選択基準」 『大阪大学言語文化学』 16:141-154 大阪大学言語文化学会
- 金澤裕之 (2008) 『留学生の日本語は、未来の日本語』 ひつじ書房
- 簡月真 (2011) 『台湾に渡った日本語の現在—リングフランカとしての姿—』 明治書院
- 小森由里 (2008) 「自称詞に見られるスタイル変異：親族の事例より」 『日本女子大学英米文学研究』 43:1-20 日本女子大学
- 真田信治 (2009a) 「第 21 回研究大会シンポジウム 東アジア残留日本語の実態—拡散と収斂—」 『社会言語科学』 11(2):102-105
- 真田信治 (2009b) 『越境した日本語—話者の「語り」から—』 和泉書院
- 渋谷勝己 (2003) 「消滅の危機に瀕した第二言語 パラオに残存する日本語を中心に」

⁸ 小森 (2008) では、母語話者の自称詞の使用が考察されているが、対話相手と話を聞いている人、の影響が強い様子がわかる。

⁹ 真田 (2009a) の報告の中で、中国東北部の残存日本語の丁寧体使用にも、合理化が見られる中で、個人差として拡散の傾向も見られると報告されている。

- 崎山理編『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』国立民族学博物館調査報告 39:31-50
- ロング・ダニエル、新井正人 (2012) 『マリアナ諸島に残存する日本語—その中間言語的特徴—』明治書院
- ロング・ダニエル、今村圭介 (2013) 「パラオで話されている日本語の実態—戦前の日本語教育経験者と若年層日本滞在経験者の比較—」『人文学報』473号 pp.1-30 首都大学東京
- Bell, A (1984) Language style as audience design, *Language in Society* 13:145-204.
- Brown, P & Levinson, S (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Giles, H (1984) The Dynamics of Speech Accommodation. *International Journal of the Sociology of Language* 46:145-204 De Gruyter Mouton
- Hakuta, K (1974) Prefabricated patterns and the emergence of structure in second language acquisition, *Language Learning* 24(2):287-297
- Labov, W (1972) *Sociolinguistic patterns*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Preston, D (1996) 'Variationist perspective on second language acquisition' in R. Bayley and D. Preston (eds.) *Second Language Acquisition and Linguistics Variation*. Amsterdam: John Benjamins
- Schilling-Estes, N (2002) Investigating Stylistic Variation, J.K. Chambers et al (eds), *the Handbook of Language Variation and Change*, pp. 375-401 Oxford: Blackwell
- Slobin, D. I (1985) Crosslinguistic evidence for the language-making capacity, In Slobin, D I (ed.) *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition*, 2:1157-256, Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates

(いまむら けいすけ・長崎大学多文化社会学部)